

番号	113	有田の大イチョウ		
所在地		有田町泉山１丁目５２４－２		
災害別		文政１１年（１８２８）台風（シーボルト台風）の暴風による大火		
目的別		伝 承	建立年	不 明
特記事項				



国の天然記念物「有田の大イチョウ」である。文政11年8月9～10日(1828年9月17～18日)に襲った台風は、子年の大風ともシーボルト台風とも呼ばれ、その被害は甚大で、有田では洪水とともに有田大火と呼ばれる大火災が発生。このイチョウの大木は、その大火の惨事を今に伝えている。

添えられた説明版によると、「大公孫樹 樹齢は推定で1000年。大きさは根回り約18m、高さ約40mあり、県下随一のイチョウの巨木である。実はつけないが、毎年秋にはみごとに紅葉し屋根の上にそびえ立つ姿が、遠くからも見られる。1926年(大正15年)、国の天然記念物に指定された。1828年(文政11年)の大火で有田の町は焼け

尽くされたが、このイチョウの木に隣接する池田広孝家は難を免れて焼け残った唯一の木造建築物である。池田家では、「イチョウの木は火を嫌い、大火の時に風をおこして火を寄せ付けず、家を守ってくれた。」と言い伝えられている。1979年(昭和54年)、イチョウの木は町木に定められている。」と記されている。

大イチョウから南西に続く内山地区は、江戸時代から有田焼製作の中心地で、当時、有田千軒とも言われていたが、この台風により岩屋川内にあった素焼き窯が強風で吹き飛ばされてその火が燃え移り、一帯は焼け野原となった。

現在の町並みのほとんどはその大火後に建てられたものであるが、昭和60年に策定された「有田町地域住宅計画～有田の家づくり・町並みづくり」によれば、「大火の経験から、土蔵に漆喰塗りを外壁から軒裏まで施した防火造りが、町並みの大きな特徴の一つとなっ

ている。」と記され、平成3年に重要伝統的建造物保存地区に選定された。



有田内山地区の町並み



国土地理院電子国土 Web



ドンバイ堀通り